
-animalIZE-

ちゅんき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

- animalIZE -

【ノード】

N5631Y

【作者名】

ちゅんき

【あらすじ】

動物と会話できる事以外はフリーの高校生だった。あの時までは

- アーマライズ - (前書き)

はじまして。何故か夢に見た内容を元に妄想を膨らませた結果がこれですよ……

どうかお付き合っておねがいします = (一一) ロペコフ

-アーマライズ -

俺は、物心ついたときから動物の言葉がわかつた。

動物つていつても今まで野良犬や野良猫、あとはカラスとかしか話をしたことがないから全ての動物がかはわからないが。

……少し唐突すぎただろ？

もう少し俺の事を紹介する前に家族の事を紹介したい。

俺んちは親父、お袋、姉貴、兄貴、そして俺の五人家族。

そして俺以外全員動物嫌いか動物アレルギー持ちとゆう驚異な家庭だ。

そのせいか家にペットはいない。

さらに動物園やら水族館やらは学校の遠足でしかいったことない。

そんな家庭で育つた俺がどうしてこんな特殊能力を授かっただかはわからないが、ひとまずわかつてしまつものはしょうがない。

とまあそんな能力以外フツーの高校生なわけだが、あとは……

「アーティストの才能を發揮するための環境を整える――」

誰かに叫ばれ、目が醒める。

「……はあ？」

クラス中の視線が俺に集まつてゐる。

「つたくお前は……開いななら家で寝てろ」

担任のクソチビ（ ）元わわわ、今ビリヒーのが思に出す。

「 」俺が通う清和高等学校。 いへフシーの高校である。

そして今この場所が一年四組。 俺は窓側の一番後ろとこつ学生が一番憧れる席に座つてこるのだ。

『 まつたぐ寝とは……だらしないわね』

そんなベストポジションに座る俺に声をかけるのは外の木の影で寝をしてこむネコ。

ここにはナシヤ、 俺が小さい頃はじめて会話した野良猫だ。

それ以来、 ずっと一緒にいる……いわゆるパートナー的な奴だ。

てかいつも寝てゐる前といわれたくないよ。

どつみぢめ授業中だし、 会話はできないのでシカトして俺は伸び寝魔の誘つまみに眠りこついた。

編集方法がよくわからなによ

（放課後）

『……のバカ……くお……』

「ん……」

頭がぼーっとする。
体が痛い。ここはどこだ？

『まつたぐ……起きなさい冬哉』

「んあ？ああ……ナシヤか……」

『ああ……じゃないわよもう一外見なさいよ』

言われた通り外を見る。

……成程真つ暗だ。

「しかしそくねたあ……」

背筋を伸ばす俺をよそにナシヤは母親の「」とく説教をしてた。

もちろん何一つ頭に入つてない。
てゆうかはだから見たら猫がにゃーにー言つてるようになしかね
えないんだがな。

「お、ようやく起きたか小凪。もう下校時間すぎてんぞ」「うーーっす

見回りの先生に急かされ帰り支度を始める。

「ん? またその猫か…懐かれたか?」

先生がナシヤを指して言つ。

最近俺のそばにいるのをよく見てるのだからつ。

「まあ……それなりに、」

教室に猫がいても騒ぎにならないくらいには緩いんだな、この高校…

「ひとまずはよ歸れよ、」

「うごーつす」

カバンをもち、教室を立ち去る先生とは逆の方へ歩きだす。

『あら? 今日は正門から帰らないの?』

「気分だよ」

実は正門を通りて帰るより裏門を通りてたほうが近いのだ。

普段は裏門方面は毎回でも真っ暗だからあまり通りたくないのだが寝すぎてしまったので仕方ないだろ?。

なんせ俺ん家の門限は働いてる奴は12時、それ以外は7時までと意外と厳しい。バイトはしてないので俺の場合は7時までに帰らないとメシ抜きなのだ。

食べ盛りの男子高校生にメシ抜きは正直、結構キツイ。

ナシヤがまだぐちぐち文句を言つていたがいつも通り総シカトをしながら俺は学校を出た。

＝＝（・・・）

「ハハハ……やつぱ不気味だな」の道は……

裏門を通り抜け、学校裏の薄暗い林の中をひたすら歩く。

『誰のせよまつたく……はやく行へわよ

俺の数歩前をナシャガ歩く。

たまにこひを振り返つてへる辺り成程こつも怖いのか……

『あー……田那ーーー久じぶりじゃなこつすか……』

「……」

『……』

急いでかい声が林に響き渡りびつづす。

「なんだカ一助かよ……驚かすなよ……」

さつきの声の正体はこいつ、名前はカ一助。名前の通りカラスだ。

ちなみに名付け親は俺だ。

なかなかダサイ名前だろ？、俺もそう思う。

『旦那最近ここら辺通らないから久しぶりですね！』

「あんまりここら辺はすきじゃねーの」

カ一助はここら辺一帯のカラス共の親玉らしく、大体はこの林の中で暮らしている。

そのせいか俺がここを通った時にしか現れない。

言われてみればここも久しぶりに通った気がするな……

「お前がいる」とすっかり忘れてたよ

『えつー！旦那ひどつ……』

『五月蠅いわよバカラス！！！少し黙りなさい！！！』

と、ナシヤがカー助を怒鳴り散らす。

本来、違う動物とは言葉を交わせないし意志の疎通もできない。
人間が動物の言葉がわからないのと一緒だ。

ただ、俺と関わった動物と別の動物だったら言葉がわかるらしい。

前にナシヤがああだこうだ教えてくれたが忘れた。

『ああ？ また襲われたいか？』

「はいはい、ストップストップ」

ナシヤがシャーツと警戒している。

そもそも俺とカー助の出会いはカー助がナシヤを襲っている所を俺
が見つけ、カー助をシバいたのがはじまりだからな。

当たり前だがこいつらは根っから仲が悪い。

「じゃあな、忘れてなければまたくるよ」

カ一助に軽く手を振り、俺らは林を走る。

タイムリミットはあと一〇分。

走ればなんとか間に合ひはずだ。
頼む、間に合え！

確か今晩は好物のカレーなんだ……！

はたして今日は何カレーなのか

「たつ…………ただいま…………」

カ一助と別れてから全力疾走。

俺の体力は既に限界だ……

「遅い！…まあ学校で寝てたんだろ！…！」

鬼のような喧騒で出迎えたのは姉、春夏。

一番上である姉はしつかり者すぎるくらいにしつかり者で姉がいればなにもしなくても事が済む。

現在大学院生。

そしてひどい動物アレルギー持ちだ。もう同情するレベルで。

「も…門限は守ってるだろうが…………」

「…………まあいいわ、はやく入つなさい」

玄関で引き止めてたのは誰だよ……
靴を脱ぎリビングへと入る。

「ただいま

「遅かつたわね

「まあな、

ひとまずバッグを放り投げ、椅子に座る。

ここで一つ、また家族の説明をしよう。

俺の正面に座っているのは母、花子。

大の動物嫌いで母の前には人間以外現れないと近所で噂の人である。

以前、友達と電話をしてたときに友達の家で飼つてる犬が受話器越しに吠えたとき「＊＊＊＊＊＊＊＊！－！－！」と叫んで発狂したのは俺のいいトラウマだ。

どんなだけ地獄耳だよ……

そして俺の隣が兄、秋羅。（あきら）

わが家の一番田で母に次ぐ動物嫌い。

幼い時に犬に噛まれてから嫌いらしいがあの時は兄貴がつまづいて犬に激突したのがいけないんだ。
犬だつて痛がつてたし。

そして今はいないがお誕生日席に座るのが父、稔。（みのる）

姉のアレルギー持ちの全ての元凶であり大黒柱。

ちなみに今日は飲み会らしい。

……さて、話に戻らうか。

「 いただきまー……」

電話音が鳴り響く。

飯を食い始めよひとするといれだ……まつたぐ。

「 いこよ俺でるわ」

電話から一一番近い俺が受話器を持ち上げる。

「 はーもしもーし?」

……

無三。

「?もしもーし?」

無言。

なんだよはやくしてくれ、今日は好物のカツカレーなんだよ。

「イタズラなら切るぞー?」

【……あなたが冬哉くん?】

女の人の声、誰だ?

「 もうすでに……誰ですか？」

【あなたが本当に冬哉くんだつたらこの状況、わかるかしら?】

「 は? なにこいつ……」

セイジで俺の思考が停止した。

受話器越しに聞こえる小さな声。

【タスケテ、……】

とても小さくて、今にも消えてしまいそうな程の、か細い声。

【オネガイ……タスケテ……】

俺はこの声を知っている。

いつも通つ廃れた神社に住んでいる、か弱い小さな命。

【オーライチャーン……トーヤの兄ひやん……】

後ろで発狂する声。

つまつゝの声は……

【「この子を殺されたくないければ神社にきなさい。1時間以内に来なければこの子を殺すわ。】

受話器をたたき付けて玄関へと走り出す。

「お……おーー待てよ冬哉ーー！」

兄貴が叫んでるが無視。

今はそれどこのじやないんだよーー！

「待てつてーーー！」

玄関で兄貴に追いつかれ、腕を捕まれる。

「放せ……ッ……」

ガツツと顔を殴られる。

口の中を切ったか血がでてきた。

「……てえ……」

「どこの行くんだよ

「兄貴には関係ないだろ……」

「関係ある

「ないっていつてんだろ……」

「ある、どこの行くかくらい聞かよ

「なんも知らねえお前等には関係ねえんだよ……」

玄関を飛び出し、暗い夜道を走り抜ける。

神社のことは、俺と近所の野良犬、野良猫しか知らない。人間で知つてしているのは俺くらいだ。ちゃんと念のために保健所の奴らが来たときの逃げパターンも教えてある。

なのになんで、何が起きてるって言つんだよ……

まばらに立つ街灯の明かりを頼りに神社へ向かつ。

時間はまだある。なにもなければいいが……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5631y/>

-animalIZE-

2011年11月19日22時56分発行